

曹洞俳壇

選・村松五灰子

一日はや鮎罫でも見に行くか

奈良県 山中 弘通

評 正月二日少し時間もある。仕掛けておいた鮎罫でも見にと。

飄々とした語り口が日常の暮らしぶりの一端を覗かせ表現の無駄もなく読者を楽ませている。

目覚ましの音だけ聞こゆ雪の朝

愛媛県 能仁めぐみ

評 今朝の濁世の音を掻き消している雪。目覚ましの音を語り雪の深さを表現。余情の深い句である。

◆ラジオよりテネシーワルツ老いの春 東京都 野村 信廣

◆結跏趺坐老いの素足が春を待つ 静岡県 富岡 一郎

◆独り炊く大根も四年味噌醤油 東京都 伊奈 三郎

◆きのうより今日の笑顔や妻の春 福島県 佐藤 忠

◆今年柿少し太しそれも良し ロサンゼルス 井上 健一

◆付合ひはあるがままにて日脚伸ぶ 青森県 中田 瑞穂

◆沢庵を漬けて片荷を降ろしけり 岩手県 関合 新一

◆舟歌のいよよ佳境に茂吉の忌 宮城県 鎌田登喜子

◆寒餅の入りし汁粉や写経会 神奈川県 池亀 恵子

◆華の帯締めてまだまだ初鏡 北海道 川上 初子

*選者吟

ビル風の急流にあり鯉のぼり

五灰子

*作句小見

街中のビルの谷間の鯉のぼり、必至で泳ぐ、けなげな姿がある。この頃は、あまり見かけなくなつた鯉のぼりも郊外や田舎の鯉のぼりは、風を得て元気にその勇姿を見せている。そんな鯉のぼりが嬉しい。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

山峡の村に猪を追う人の声人もあわれや猪もあわれなり
大阪府 高畑 良圓

評 餌を求めて人里に下りてくる猪も哀れだが、人手不足に悩まされながらやつと収穫時期を迎えた作物を荒らされる村人も哀れと詠う。「人の声」に畳みかけるようにまた「人」を重ね心の昂ぶりを表す。共存の方法はないものだろうか。

亡き後は焼かるる日記と思ほへどこまごまご
つづる日々の生活を
島根県 雑賀 花子

評 歌に詠みたいと思うことも同じ欲求ではないだろうか。このような小さな営為が、言葉を持つ人間とそうでない動物を隔てる。細やかな行為だが文化の根幹を担うものと思う。

◆ 畦を焼く遠近に村動く出稼ぎの人らも徐々に帰り来
秋田県 小田 篤恭葉
◆ 托鉢の折りの声と鈴の音と凍てる雪路に沁み入る如し
岩手県 六戸 さとる

◆ 遠き日の亡母の面影うすれども桑の針箱木目鮮らげき
兵庫県 前田 あつ子

◆ おばしまに白鷺の待ちちどほし動かぬ鷺に風花が飛ぶ
岩手県 関合 新一

◆ バックする車のライト白色は後ずさりするものの寂しき
岐阜県 後藤 進

◆ ゴンドラの唄口ずさみし若き頃還らぬ青春の愁い知らず
滋賀県 三田 和子

◆ 深山に炭焼く仙人訪ねたり白い歯が見ゆ黒き顔より
山梨県 北村 富子

◆ 梅が枝に明りほつほつ灯のごと蕾ふくらむ湯船の窓辺
新潟県 今成 愛子

◆ パソコンもスマホもせず孤立して都会に生きて不快感
東京都 野村 信廣

◆ 睦月の日吹雪は下から当たり来る体斜めに歩み進める
秋田県 小松 紀子

* 選者詠

われと汝われらと呼ぶこと少なくて銀杏並
木の黄落のなか
ちづ

* 作歌小見

車は無機質の物体だからそこに思いはないのだが、自らの心象を車がバックする動きに託して表現した後藤さんの歌、亡き母の針箱の木目の鮮明さにその面影が薄れてゆくことを逆説的に嘆く前田さんの歌にも感銘深いものがありました。



大本山永平寺



制中せいちゆう

永平寺は、夏は五月・冬は十一月から「制中」が始まります。

「制中」とは、約九十日の間、修行僧が一処に留まり、よくよく心をめぐらして坐禅修行に勤しむことです。

制中の始まりには、修行僧たちを率いる首座と呼ばれる「第一座」が選ばれます。第一座は制中のはじめに、禅師さまに代わって修行僧たちと問答をし、その力量が問われます。

道元禅師さまは嘉禎二（一二三六）年、宇治の興聖寺において弟子の懷奘さまを第一座に請ぜられました。そして、道元禅師さまは説法の後、懷奘さまに「私に代わって衆僧（修行僧）に説法をするように。」と命じられました。

その時の道元禅師さまのお言葉に「玉は琢磨によりて器となる。人は錬磨によりて仁となる。——云々——必ずみがくべし、すべからく練るべし。」とあります。

修行僧たちが、各々に自らを励まし、さらには、共に切磋琢磨して仏道修行をすることの大切さを示されているのです。

さて本年も、この春に入門した「新到」の修行僧たちが加わり、いよいよ錬磨の日々が始まります。

暁天の薄暗い中、警策のパシツという音が、新緑極まる山川の響きと共に、私の背筋を伸ばしてくれます。

今日も、修行僧たちが法堂への階段を駆け上り、廊下掃除をする琢磨の音が聞こえてまいります。

ご本山だより



大本山總持寺



夏安居げあんこ

この春に上山じやんざんした新しい修行僧六十余名が加わり、總持寺本山僧堂では夏安居制中という修行集中期間に入っております。

夏安居はお釈迦さまの時代に起源を發する行持ぎょうじで、「元來「雨」を意味しました。この時期、インドでは雨期となり托鉢たくはつなどで心ならずも小動物を踏み殺すおそれがあるため、外出せず一カ所(精舎しやうしゃ)に集まり留まって修行を集中的に行いました。

これが中国から日本へと伝わり、修行道場の夏安居として現在も厳格に行じられています。

夏安居は四月から七月までの三カ月、約九十日間にわたって続けられます。その内容は七〇〇年前に總持寺開山・瑩山けいざん禪師が定められた『瑩山清規けいざんしんぎ』(『洞谷清規とうくしんぎ』ともいう)にも示されており、特に五月中旬には「五則ごそく」という行持が行われます。そのクライマックスが「首座法戦式しゆそほっせんしき」です。

首座法戦式では全修行僧の先頭に立つ「首座」が江川禪師さまの命を受け、大勢の修行僧と禅問答を繰り広げます。

それまでの生活様式(多くが学生)から僧堂に入門し、戸惑いながらも精進してきた新しい修行僧たちも、この頃になると少しずつ修行生活に馴染んできている自分自身に気が付くのです。